

# 小5国 問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

八月に入ってまもなくのある日、ぼくとコウちゃん、利根川の土手に立っていた。

(1) 「今日も暑い一日になりそうだな」

そう言って、まぶしそうに空を見あげたコウちゃんのおでこには、もう汗が光っていた。ぼくの家は、利根川の土手のすぐ近くだ。その土手を海にむかって、およそ百キロ。この気の遠くなるような距離を、ふたりですつと歩いていく。

あの日、勢いで言った「行くよ」のひとことに、コウちゃんは「よっしゃがんばろうな」と、笑顔で握手を求めてきた。お父さんはしばらく驚いた顔をしてたけど、すぐにコウちゃんの肩を軽くたたいて「よろしくたのむよ」と言った。お母さんだけが「なに、ばかなこと言ってるんですよ」って、なかなか本気にしていなかった。でも最後はふたりの考えにしぶしぶ賛成したんだ。いちばん(3)のはぼく。まさか、本当に行くことになるなんて思ってもみなかった。だけど、今言ったばかりのことをすぐに「あ、今のやっぱりうそ。冗談だよくん」なんて言い直すわけにもいかないし、なんとなく、本当になっちゃったんだ。そんなわけでぼくは今、どこまでもまっすぐにのびた一本道の上にいる。

「コウちゃん、砂利道って歩きにくいねえ」  
「そうだろ。オレがいったとおりに底の厚いくつをはいてきて、正解だったろう」

そのとおりだ。こんな石ころだらけの道じゃ、いつもはいている運動ぐつみたいな底の薄いくつをはいてきたら、すぐに足の裏が痛くなっちゃうにちがいない。ぼくとコウちゃんはいろいろな話をしながら前に進んだ。けっこう楽しい。なんだ、これって案外どうってことないな。

組 番号前

海まで楽勝でいけちゃいそうだ。へんな心配して損しちゃったよ。

「一平」

とつぜん、コウちゃんがぼくのほうを見た。

「なに？」

「なあ、一平は本当に『歩いて海を見にいきたい』なんて思ったのか？ あのと、頭にきて言い返しちやっただけど、そのあと、引っこみがつかなくなったってとこなんじゃないのか？」

ぼくは少しのあいだ、なんて答えようか迷った。

「うーん、前からコウちゃんといっしょにどこかへ行ってみたいとは思ってたよ。もちろん、コウちゃん式の旅でね。だけど、いざ行くかって言われると自信がなかった。だっていつもコウちゃんの旅の話を聞いているだけで、『疲れそーっ』って思ってたからね」

「それなのに出発したってことは、やっぱり頭にきてたってことだな」  
コウちゃんはお見通しだ。そのとおりだもんね……。ぼくは返事に困って言った。

「でも、思ったよりずつと楽だね、これって。なんなら海までダッシュしていく？」

コウちゃんは大きな声で笑ったあと、ぼくのリュックをポンと軽くたたいた。

二時間ぐらい歩いたところで、一度リュックをおろした。背中が汗でグツシヨリ。たった二時間で……。

「どうだ一平、少し疲れたか」

コウちゃんは、ニヤニヤしてぼくの顔をのぞきこんだ。

「ぜん、ぜん。このくらいで疲れるわけじゃないじゃん。早く行くよ」  
(5) 意地っばりだな、と我ながら思った。

(山口理「河を歩いた夏」あすなる書房による。)

1 「今日も暑い一日になりそうだな」とありますが、登場人物の様子から暑い日になりそうなのが分かる一文を文章中からぬき出し、次の□の中に書きなさい。

①

2 およそ百キロ。この気の遠くなるような距離 とありますが、道の様子から道のりが遠いことが分かる表現を文章中から十六字でぬき出しなさい。

②

3 ③に入る言葉としてもっともよいものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を□の中に書きなさい。

- ア 喜よろこんだ
- イ 困こまった
- ウ 悲かなしんだ
- エ おここった

③

4 これって案外どうってことないな。 とありますが、「これ」とはどんなことですか。次の□に合う言葉を文章中からぬき出し、書きなさい。

コウちゃんと

およそ百キロを

こと。

④

5 意地っぱりだな、と我ながら思った。とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとしてもっともよいものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を□の中に書きなさい。

- ア なあんだ。たいしたことないな。まだいくらでも歩けそうだ。
- イ 全然疲れていない。予定よりどれくらい早く着けるか楽しみだ。
- ウ 少し疲れた。だから、家に帰って、お母さんに早く会いたい。
- エ 疲れた。でも、このくらいで疲れたなんて思われたくない。

⑤